

序 文

丹波篠山の地に生を享け、城跡を囲む堀端の傍らにあった高等学校の書庫で古書籍の山に遭遇してから京都の地に至るまで、平安文学に漠然とあこがれながら日を送つてのち、高等学校で充実した教員生活の日々を過ごした。教えることは学ぶことだとの格言を胸に伝統校での授業と研究とを併せる楽しさを学んだ後、恩師鈴木弘道先生の後任として相愛大学に移り、田中重太郎先生の春曙文庫からも多くを学ばせてもらい、また、宗教的雰囲気の漂う教育環境になじむこともできた。さらにその後、母校である立命館大学の教壇に立つようになり、衣笠山のふもとの研究室から京都の風光を飽くことなく日々眺めることができた。半世紀の間、人、もの、周囲のことが自分の研究に寄り添い力を与え働きかけてくださっていたのだと、過ぎ去ってから、深々と感謝の気持ちが増える。自分は何と果報者ではないか。美しい思い出に浸ったまま人生を終えようとしていたとき、さらに加えて、長年自分を励ましお導きくださっている知人、友人など相集い、御研究の成果の一端をお示しくくださるといふありがたいことまでもお与えくださると言う。このような幸せなことがあつていいのだろうかとも思い、感謝のことばもまったく見当たらぬ。

余算山の端にさしかかり、机に向かう気力も体力も次第に失せつつある。この姿を憐れんでか、本論集を

企画してくださった編集委員会の皆様、また、およそ採算のとれないはずのこのような書物を世に出して
くださる武蔵野書院の皆様、共々に衷心より感謝申し上げます。

令和六年五月

中
西
健
治

目次

序文	……………	中西健治	i
物語、その「性」を問う	……………		
——「散逸」と「改作」を軸にして——	……………	原豊二	1
かぐや姫の和歌の機能	……………		
——難題提出者に対する返歌の検討——	……………	曾根誠一	17
光源氏初期の杳たる身分	……………		
——元服の夜の「そひぶし」と高麗の相人の観相——	……………	坂本信道	37
看病する者の「食」	……………		
——光源氏と薫を比較して——	……………	荻田みどり	57

女一の宮の女房・小宰相について

——付、「土などのこごち」小考——……………吉海直人 77

『浜松中納言物語』「かうやうけんの後」の唐土の宮廷不参再考

——文脈・宮廷表現からみる男主人公との逢瀬の宿世における〈装置〉——…松浦あゆみ 93

『浜松中納言物語』における「たぐひ」

——衛門督北の方が果たす役割と物語展開——……………八島由香 113

『浜松中納言物語』における吉野の聖の予言をめぐる………大槻福子 129

『寝覚物語』読解の試み

——歌語「天の原」など——……………中西健治 145

寢覚物語本文整定試案

——「ことなしび」と「ことならひ」——……………須藤 圭 163

『夜の寢覚』における登場人物の意志と主題の関係

——「あながちなり」を手掛かりとして……………池田彩音 185

『夜の寢覚』第一部の男君造型

——「をさむ」・「しづむ」を中心に……………石橋 孝 203

『夜の寢覚』研究と古筆切

……………横井 孝 223

「虫愛づる姫君」の虫たち

—— 神話世界との交歓……………野村倫子 243

『雲隠六帖』テキストと〈源氏物語世界〉に関する若干の考察……………中島正二 257

和泉式部「物思へば」歌と貴船神社……………	三浦俊介	277
紫式部の物の気（物の怪）観		
——『紫式部集』四四番歌、「男」は「護法神」を召喚できるか——……………	星山健	297
平安時代の女御と更衣		
——宇多・醍醐朝の後宮にまつわる疑問四題——……………	高橋照美	309
中野康章旧蔵『鹿百首』について……………	川崎佐知子	327
『後普光園院殿鷹百韻連歌』考……………	大坪舞	339
衣笠本『紫式部物語・和泉式部物語』校訂試案……………	藤井佐美	359

大庭賢兼の和歌

——地名を詠み込む歌に着目して——……………西本寮子 383

「扇市」攷

——本邦禪林における陸游詩受容を中心に——……………中本 大 397

廣幡忠幸と慈照院……………本多潤子 417

『醒睡笑』卷之五「嫉心」における狂歌咄の特質……………児島啓祐 437

『出世景清』題意考

——景清の「出世」をめぐる——……………竹内洪介 453

芭蕉晩年の作風と『源氏物語』

——近江蕉門から伊賀蕉門へ——……………高井悠子 465

川越市旧袋町祇園社『牛頭天王縁起絵巻』から見る近世牛頭天王信仰の特徴 ……鈴木耕太郎	481
一言の失、一言の信	
——僧正遍昭の「まことすくなし」と『南総里見八犬伝』—— ……藏中しのぶ	499
石川五右衛門「釜ヶ淵伝承」考 ……山本 淳	515
鹿児島県三島村のうつぼ舟伝説 ……原田信之	533
海外における和刻本漢籍受容の一考察 ……東野 陸	551
編集後記 ……	567
執筆者紹介 ……	569

物語、その「性」を問う——「散逸」と「改作」を軸にして——

原 豊 二

一 はじめに

日本の物語文学にはどのような特徴的な性質があるのか。この古くて新しい問題に向き合ってみたいと思う。もともとこうした議論はしばしば抽象的に陥りがちであり、それを避けるために古代・中世の物語文学に限定するわけであるが、物語文学の生成と蓄積を考えるにあたって、一種の新陳代謝とも考えられる「散逸」と「改作」の問題に正面から向き合ってみたいのである。

二 散逸物語とは？

物語文学に関わる教育や研究の場において、しばしば「散逸物語」という問題に向き合わなくてはならないことがある。つまり、現存する物語文学作品とは別に多くの散逸した物語があり、その存在を認めなくては、現存する物語の読解にも支障が生じるというわけである。と同時に、文学史的事実としても無視できない事柄であることは間違いない

いだろう。「散逸物語」の研究は、主にそのストーリーや登場人物を中心とした復元研究が中心であったと稿者は認識している。先行研究者による復元研究については、その主体の豊かな想像力に依存する傾向もあったとは思うが、「散逸物語」研究のおおよそのフレームを提示した点は大いに評価すべきであろう。

そもそもの話であるが、「散逸物語」とは何を指すのであろうか。現在、「散逸物語」と呼ばれるものは、物語の本文が基本的に残っておらず、しかし、その一方で他の文献資料にその書名や登場人物、和歌、作品への批評が残るもの、とやうしかない。逆に言えば、他の文献資料にその痕跡が全く残らず、本文も現存しない物語作品は、「散逸物語」とは登録されないのである。よって、表記の矛盾のようにも思えるが、通常指示される「散逸物語」とは、何らかの形で残存があり、完全な意味では「散逸物語」ではないのである。さらに言えば、いわゆる「散逸物語」は資料研究の立場からは十分に「現存物語」と言わざるを得ないはずなのである。

何言葉遊びを弄しているわけではなく、この「散逸物語」という言い方が、教育や研究の場で行くらかの混乱を生じさせたのではないかと同時に、復元研究に主眼を置いた研究では見過ごされたところが多々あるのではないかと実は考えている。

もう少し具体的に見ていこう。『夜の寝覚』も『浜松中納言物語』もともに現存する本文以外にも、多くの本文（ここでは巻というべきか）がかつてあったことは周知の通りである。すると失われた部分の復元研究が同時に行われるのであるが、このあたりの手法は、散逸物語の復元とそれなりに似ていると言つてよい。しかしながら、この両作品を「散逸物語」とする見方はほぼ聞かない。あるいは、古筆切一葉が発見されたとして、現存物語の本文にはないことから、この古筆切を「散逸物語」ではないかと指摘する場合もあるが、これらと『夜の寝覚』や『浜松中納言物語』との違いは現存本文の残存率の差でしかなく、両者を執拗に乖離させることは論理的には間違っている。

それでも「散逸物語」の研究が確固として行われた根拠は、『無名草子』や『拾遺百番歌合』『風葉和歌集』などの

具体的な資料の伝存であり、主にこうした鎌倉時代初期前後の遺産を通して成り立った研究分野と言っても過言ではない。もともと、このような資料から『在明の別れ』など「散逸物語」とされてきたものが、比較的近年、その本文が発見されることで「散逸物語」から離脱する場合もあり、個別具体的な作品においてはその枠組みからの加除が取り得るのである。

三 改作された物語

さて、ここでは「散逸」という問題系に関わる事柄として「改作」ということを挙げてみたい。比較的資料が残っているものとして、『とりかへばや』(古本)と『今とりかへばや』の関係がある。知られる通り、両者はともに『無名草子』に取り上げられ、その比較を旨とした批評が述べられている。『無名草子』では古本の拙劣さに注目し、今本の洗練された内容を評価するのであるが、一方で改作の作品については一般論として「何事もものまねびは必ずも⁽¹⁾とには劣るわざなるを」とも言っており、改作の成功は稀でもあるという認識のようだ。『無名草子』の時代、二種あった『とりかへばや』であるが、古本の本文は後に失われ、今本つまり改作本のみが現在まで伝わっている。これは、改作という営為によって、本文の淘汰がなされた例として見える点で興味深い。古本の本文が「散逸」し、改作本の方が現存する例として、『住吉物語』や『海人の刈藻』なども挙げられるが、これらが改作本の優位性によってその書写に偏りが生じ、結果、古本の本文は書写されなくなって「散逸」したという認識だけで捉えてよいものであろうか。

というのは『とりかへばや』の場合、改作本であったとしても、現存する写本はすべて近世期の同一祖本から派生したと見られるのであって、物理的な現存については偶然性の結果もあったのではないかと思う。また、『無名草子』も述べるように改作本の方が洗練されていて優性であるとは限らないし、むしろそれが稀であるということであるか

ら、改作本の方が「書写される価値」のあるものと言い切ることは難しい。

それでも、「散逸」という現象と「改作」という営為を結びつけるのであれば、それは同一題名という極めて重要な両者の一体性というべきであろう。そして、『とりかへばや』に顕著なように、その題名自体がこの物語の構想を示しているわけで、古本も今本も大きなところではその内容は類似しているわけである。

全体を通して言えることは、『無名草子』や『拾遺百番歌合』『風葉和歌集』などから見ると、物語文学作品の残存率はかなり低いのであるから、そもそも物理的に現存する方が珍しいと言つてよい。つまり、「散逸」という物理現象自体は起り得る当然のことであり、「改作」が故に、直接的に「散逸」を生じさせたという理屈は無理であろう。一方で、これも物語文学作品の残存率の問題として、比較的改作本の現存が目立っており、「同一題名」という枠の中で言えば、古本の「散逸」傾向はそれはそれで認知するべきではないか。

ところで、これも「散逸」と同様なのであるが、「改作」の定義もだいたい難しい。『無名草子』では現存の『とりかへばや』を「今」という語で区分けしているが、いったい何をもって「改作」と言うのだろうか。例えば『源氏物語』の諸本のように本文の異同程度のことであれば、これは「改作」とは見なされないであろう。逆に、あまりにオリジナルのものを変化させ過ぎたとしたら、これは「改作」を超えて「創作」に近づくわけである。つまり、「改作」とは程よい加減でオリジナルを変化させたものであるわけだが、全体の構想の変化は最小限に留め、個別的な人物造型や場面生成、またこれらに関わる表現のレベルでの変化を主としたようである。

四 長編物語の「挿入的改作」

短編や中編の物語に比べて、長編の物語は改作がされにくいようである。例えば『うつほ物語』や『源氏物語』の全面的な改作というのは見出すことができない。それでは、こうした作品に全く改作的営為がなされなかったのかと

言えば、そうではない。ここでは『源氏物語』を例に考察していきたい。

『源氏物語』成立後、その圧倒的な文章の長さ乗り越え、そのおおよその内容を理解するために梗概本が作られた。古筆切に残される梗概本のほか、『源氏小鏡』や『源氏大鏡』さらに近世においては北村湖春による『源氏物語忍草』などがある。それぞれがその時代のニーズに合わせたものであると同時に、これらの多くは作中和歌を重視し、いくらかの注釈的な要素も含まれていると言えよう。

ただ、梗概本は『源氏物語』それ自体を乗り越えようとか、そこまで行かずとも対等を目指すという姿勢が見出しづらく、『源氏物語』自体を凌駕するものではなかった。ともあれ、梗概本は『源氏物語』の「改作」の一つのスタイルであるとしてよいだろうし、現代の『源氏物語』の入門書の類もこれに含まれるであろうから、この「改作」の流れと蓄積は日本文化全体に刺激を与え続けているとも言えるのである。

さて、その他の手法による『源氏物語』の改作作品として、『山路の露』『雲隠六帖』、また宣長による『手枕』がある。それぞれ作品の成立時期や時代状況は異なっており、一概に言えないが、実はいくらかの共通点があるかと思うのである。というのは、この三つの作品はいずれも『源氏物語』の本文に書かれなかったところを描こうとしているからである。光源氏の死、また夢浮橋巻の後、光源氏と六条御息所の出会いなど、『源氏物語』において隙間を埋めるような形式での改作であるというのがその特徴と言ってよく、ここでは「挿入的改作」という言い方をしてみたい。すなわち、『源氏物語』の全面的な改作はその分量から見て不可能であり、そのために「書かれていなかった」と後代の人物が考えたところが挿入的に描かれるというわけである。こうした挿入的改作は、『源氏物語』をよく知る読者にとっては歓迎されたのではないだろうか。しかしながら、これらの改作は『源氏物語』という存在に全く依存するものでもあったのだ。

これらの挿入的改作のうち、『源氏物語』に本来存在していた本文が発見されたかのような言説を示しているもの

がある点は重要であろう。『山路の露』の以下の序文はその本文の発見が描かれている。

これは、かの光源氏の御末の薫大将と聞こえし御あたりのことなれば、その続きめいたるこそ、いとかたはらいたうつつましかれど、ゆめゆめさには侍らず。ただかの小野の里人に尋ね逢ひたりしありさま、こなたかなたの御気色^①くはしう見ける人の、夢のやうなる御仲のあはれに忍びがたくおぼえけるままに、^②何となく筆のすさみに書き置き侍る、その人、心にもさこそ人には漏らさざりけんを、かりそめなる旅の空にて、主さへはかなくなりければ、あだなる人の、その行く末をとぶらはんとて、藻塩草かき集めけるそぞろごとども、みな選り出でて、経の紙に漉かせけるついでに、^③これを見つけ、

「何の聞き所ある節もなければ、果ていかならんと思ひわたる人の行方なりける」^②
と見るばかりの、せめてをかしさに^④残し置きけるにやあらん。

文脈が複雑なので、文意をとるのがやや難しいところでもあるが、傍線部に即して考えてみる。線部①の「くはしう見ける人」であるが、この人物（A）は『源氏物語』の世界を現実に見たかのようになっている。（物語の手法としてこのような形になっているのだが、虚構作品である『源氏物語』に関して、このような人物は実存し得ないはずである。）それで、この「くはしう見ける人」は線部②「何となく筆のすさみに書き置き侍る」の通り、その内容を書記し、ここに書記された物語ができあがる。ところが、この人物が亡くなった後、遺品整理であろうか、新たに線部③「これを見つけ」た人物（B）が登場する。この人物は短い感想を述べて、線部④が示すようにこの書記された物語を捨てずに残したらしい。線部④「せめてをかしさに残し置きけるにやあらん」は草子地のようになっているのだが、「にやあらん」は推量であり、最後にこの序文の書き手である人物（C）の語りに辿り着くのである。